

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

Q1. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「行き」は四段「行く」連用形。連用形＋「し」、下が体言「人」→過去連体形。「行った人」。

Q2. 答え：形容詞ク活用「清し」終止形

解説：「清し」（ク活用）の終止形。「月が清らかである」。文末で句点。

Q3. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「出家す」（漢語＋サ変「す」の複合動詞）の連用形「出家し」＋過去「けり」。過去「き」の連体形「し」の下に「けり」（連用形接続）は続かない。「その人は、すぐに出家した」。

Q4. 答え：形容詞シク活用「悲し」の連用形「悲しく」の活用語尾の一部

解説：シク活用は語幹「悲」に活用語尾「しく・しく・し・しき・しけれ」（カリ活用「しから・しかり・しかる・しかれ」）が付く。連用形「悲しく」の「し」は活用語尾「しく」の一部で、過去「き」や副助詞ではない。「悲しく泣く」。

Q5. 答え：副助詞「し」

解説：「我し思へば」の「し」を取り除いても「我思へば」で意味は通る→強調の副助詞。「私が思うから、やはり恋しい」。

Q6. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「住み」連用形＋「し」＋体言「人」→過去連体形。「京に住んでいた人」。

Q7. 答え：形容詞ク活用「高し」終止形

解説：「高し」（ク活用）の終止形。文末。「山が高い」。

Q8. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「学問す」（漢語＋サ変「す」の複合動詞）の連用形「学問し」＋存続「たり」。過去「き」の連体形「し」に「たり」（連用形接続）は続かないので、過去とは取れない。「学問をしていた」。

Q9. 答え：副助詞「し」

解説：「のみし」の「し」は強調の副助詞。「のみ」と重ねて強調。「私だけが知っている」。

Q10. 答え：形容詞ク活用「寒し」終止形

解説：「寒し」（ク活用）の終止形。文末。「風が寒い」。

Q11. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「見」は上一段「見る」連用形（同形）＋「し」＋体言「夢」→過去連体形。「見た夢」。

Q12. 答え：形容詞シク活用「美し」の連用形「美しく」の活用語尾の一部

解説：「美し」（シク活用。語幹は「美（うつく）」）の連用形「美しく」＋動詞「咲く」＋体言「花」。「し」は活用語尾「しく」の一部。「美しく咲く花」。

Q13. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「帰り」連用形＋「し」＋体言「人」→過去連体形。「帰った人」。

Q14. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「仕うまつり」連用形＋「し」＋体言「こと」→過去連体形。「お仕えしたこと」。

Q15. 答え：副助詞「し」

解説：「この子を」＋強意の副助詞「し」＋係助詞「ぞ」。「し」を取っても「この子をぞ頼みける」で意味が通る。副助詞「し」は「しぞ」「しも」のように係助詞の上に来る。「ぞ」の結びは連体形「ける」。「母はただこの子だけを頼りにしていた」。

Q16. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「念仏す」（漢語＋サ変「す」の複合動詞）の連用形「念仏し」＋存続「たり」。「一晩中念仏を唱えていた」。

Q17. 答え：形容詞シク活用「物悲し」の連体形「物悲しき」の活用語尾の一部

解説：「物悲し」（シク活用）の連体形「物悲しき」＋体言「秋」。「し」は活用語尾「しき」の一部。「なんとなく悲しい秋の夕暮れ」。

※ シク活用の場合、連体形は「～しき」となる。

Q18. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「来」はカ変。過去「き」の連体形「し」は、カ変には未然形「こ」にも連用形「き」にも付くので、「こしかた」「きしかた」の両方の読みがある（カ変に付かないのは終止形「き」だけ）。下が体言「方」→過去連体形。「過ぎ去った時（過去）・通り過ぎてきた方向」。

Q19. 答え：形容詞ク活用「長し」終止形

解説：「長し」（ク活用）の終止形。文末で言い切る。「秋の夜は長い」。

Q20. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「散り」連用形＋「し」＋体言「桜」。「散った桜」。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「行き」（四段連用）＋「しか」（過去「き」已然形）＋「ば」（原因）。「あそこへ行ったので、事情がわかった」。

Q22. 答え：形容詞シク活用「美し」の連用形「美しく」の活用語尾の一部

解説：「美し」（シク活用）連用形「美しく」＋動詞「眠る」。「し」は活用語尾「しく」の一部であり、助動詞や独立した「し」ではない。「美しく眠る」。

Q23. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「あり」ラ変連用形＋「し」＋体言「日」→過去連体形。「過ぎ去った日／在りし日」。

Q24. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「別れ」（下二段「別る」連用形）＋完了「ぬ」連用形「に」＋過去「き」連体形「し」＋体言「人」。「にし」は完了と過去が重なった形（過ぎにし・なれにし）。「に」を格助詞、「し」をサ変と見誤らない。「別れてしまった人が、夢に現れた」。

Q25. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「言ひ」連用形＋「し」＋体言「人」＋係助詞「ぞ」＋ラ変「ある」連体（ぞの結び）。「物を言った人がいる」。

Q26. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「旅す」（旅行する、の意のサ変）連用形「し」＋過去の助動詞「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」。「旅をしたので、疲れた」。

Q27. 答え：形容詞ク活用「強し」終止形

解説：「強し」終止形。文末。「風が強い」。

Q28. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「思ひ」連用形＋「し」＋体言「こと」。「思ったことを書きとめてしまった」。

Q29. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「来」はカ変（過去「き」の連体形「し」は、カ変には未然形「こ」にも連用形「き」にも付く）。「来し」は連体形で、下に「こと」を補って読む準体法（来たこと）。「を」は格助詞。「春が来たことを知らない」。

Q30. 答え：形容詞シク活用「悲し」の連体形「悲しき」の活用語尾の一部

解説：「悲し」（シク活用）連体形「悲しき」＋体言「朝」。「し」は活用語尾「しき」の一部。「悲しい朝」。シク活用の連体形は「～しき」。

Q31. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「降り」連用形＋「し」＋体言「夜」。「雨が降った夜」。

Q32. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「吹き」連用形＋「し」＋体言「人」。「笛を吹いた人」。

Q33. 答え：副助詞「し」

解説：「今日」＋強意の副助詞「し」＋係助詞「も」（「しも」で一語の副助詞とみる説もある）。「し」を取り除いても「今日も雨降りて」と文は成り立つ。「しも」で「よりによって」の気持ちが加わる。「よりによって今日雨が降って、出かけられない」。

Q34. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「出仕す」サ変連用形＋尊敬「たまふ」。「出仕なさる」。

Q35. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋接続助詞「ど」（逆接）

解説：「言ひ」連用形＋「しか」（過去已然）＋「ど」。「物を言ったけれども、答えない」。

Q36. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「聞こえ」（下二段「聞こゆ」連用形）＋過去「き」。「き」の終止形は「き」、連体形は「し」、已然形は「しか」。文末なのに「し」になっているのは、上の係助詞「ぞ」の結びで連体形になったから。「夜が更けて、風の音が聞こえた」。

Q37. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「寝（ね）」下二段連用形＋「し」＋体言「夜」。「眠った夜」。

Q38. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「植ゑ」はワ行下二段「植う」の連用形（ワ行下二段は「植う・飢う・据う」くらい）。連用形＋「し」＋体言「所」→過去連体形。サ変の連用形「し」は体言に直接は続かない。「早苗を植えた所」。

Q39. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「読み」連用形＋「し」＋体言「こと」。「文章を読んだこと」。

Q40. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「こぼれ」下二段「こぼる」連用形＋「し」＋体言「葉」。「露がこぼれた葉」。

Q41. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「あひ知り」（複合動詞）連用形＋「し」＋体言「人」＋断定「なり」。「知り合いだった人である」。

Q42. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「書き」連用形＋「し」＋体言「手」。「物を書いた手」。

Q43. 答え：形容詞シク活用「美し」の連体形「美しき」の活用語尾の一部

解説：「美し」（シク活用）連体形「美しき」＋体言「花」。「し」は活用語尾「しき」の一部。「とても美しい花」。

Q44. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「吹き」（四段連用）＋「しか」（過去「き」已然形）＋「ば」（原因）＋「立ち」（四段連用）＋完了「ぬ」。「風が吹いたので、波が立った」。

Q45. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「住み」連用形＋「し」＋体言「頃」。「都に住んでいた頃」。

Q46. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「参り」連用形＋「し」＋体言「朝」。「御所に参った朝」。

Q47. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「知り」連用形＋「し」＋体言「事」。「知っていたこと」。

Q48. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「答へ」下二段「答ふ」連用形＋「し」＋体言「人」。「答えた人」。

Q49. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「仕うまつり」連用形＋「し」＋詠嘆「かな」（連体形接続）。「お仕えしたことだなあ」。

Q50. 答え：副助詞「し」

解説：「いま」（＝今）＋「し」（強調）。「今こそ思う」。「し」を取れば「いま思ふ」で文意は通る。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

Q51. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「聞き」連用形＋「し」（連体形）＋逆接の接続助詞「ものを」（～のに。連体形に付く）。「あると聞いていたのに、見ないので信じない」。

Q52. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋逆接「ど」

解説：「来」はカ変（過去「き」の已然形「しか」は、カ変には未然形「こ」にも連用形「き」にも付く）＋「しか」（過去已然）＋「ど」。「春が来たけれども、花が咲かない」。

Q53. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「来（こ）」はカ変の未然形（過去「き」の連体形「し」は、カ変には未然形「こ」にも連用形「き」にも付く）。上の係助詞「や」（疑問）の結びで連体形「し」。「あなたが来たのか、私が行ったのか、わからない。夢か現実か、寝ていてか覚めていてか」。伊勢物語69段の歌（古今集にもある）。

Q54. 答え：①前の「し」＝サ変動詞「す」連用形 ②後の「し」＝過去の助動詞「き」連体形

解説：「行幸し」（サ変連用）＋尊敬「たまひ」連用＋過去「き」連体「し」＋体言「こと」。「行幸なされたことがある」。

Q55. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「待ち」（四段連用形）＋「し」。上の係助詞「なむ」の結びで連体形。「あの人を待っていたのです」。

Q56. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「言ひ」連用形＋「し」＋体言「人」＋引用「と」＋係助詞「こそ」＋已然形「思へ」（こそこの結び）。「言った人だと思うのだ」。

Q57. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：形容動詞「あはれなり」語幹＋引用「と」＋「思ひ」連用＋「し」＋体言「人」。「しみじみと思った人」。

Q58. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「詠ぜ」はサ変「詠ず」の未然形。過去「き」の連体形「し」は、サ変には未然形に付いて「せし」（「詠ず」なら「詠ぜし」となる。文末の「ぞ」は、疑問の語「誰」と合わせて強く問う。「この歌は誰が詠んだのか」。歌は周防内侍（千載集・百人一首）。

Q59. 答え：副助詞「し」

解説：「名に」＋「し」＋「負ふ」。「し」は強調の副助詞で、取り除いても「名に負ふ」で意味が通る。伊勢物語の歌「名にし負はばいざ言問はむ都鳥」で知られる言い方。「（その）名として持っている」。

Q60. 答え：形容詞ク活用「清し」終止形

解説：「清し」終止形＋引用「と」＋尊敬「仰せらる」。「月の光が清らかだ、とおっしゃる」。

Q61. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「とどまり」連用形＋「し」＋体言「人」＋「なし」。「都にとどまった人はいない」。

Q62. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「食ひ」は四段「食ふ」の連用形。連用形＋「し」＋体言「所」→過去連体形。「食ひす」というサ変動詞はない。「物を食べた所」。

Q63. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「対面す」（漢語＋サ変「す」）の連用形＋尊敬「たまふ」。「宮にお会いになる」。

Q64. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋逆接「ど」

解説：「いさめ」（下二段「いさむ」連用形）＋「しか」（過去已然）＋「ど」。「親が忠告したけれども、聞かなかった」。

Q65. 答え：副助詞「し」

解説：「思ふ人」＋強意の副助詞「し」＋「あれば」。「し」を取っても「思ふ人あれば」で意味が通る。「～し…ば」は副助詞「し」のよく出る形（業平の歌の「つましあれば」と同じ）。「恋しき」は係助詞「ぞ」の結び。「（都に）愛しく思う人がいるので、やはり都が恋しい」。

Q66. 答え：形容詞シク活用「悲し」の連体形「悲しき」の活用語尾の一部

解説：上の係助詞「ぞ」の結びで、「悲し」（シク）が連体形「悲しき」になっている。「し」は活用語尾「しき」の一部。「物思いをする秋が悲しいのだ」。

Q67. 答え：形容詞シク活用「美し」の連体形「美しき」の活用語尾の一部

解説：「いみじく」（シク活用「いみじ」連用形）＋「美しき」（シク活用連体形）＋体言「児」＋断定「なり」。「し」は活用語尾「しき」の一部。「美し」は平安の文ではおもに「かわいらしい」の意味。「とてもかわいらしい子供である」。

Q68. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「帰り」連用形＋「し」＋詠嘆「かな」（連体形接続）。「帰ったことだなあ」。

Q69. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「嘆き」連用＋「し」＋体言「夜」。「嘆いた夜」。

Q70. 答え：形容詞ク活用「遠し」終止形

解説：「遠し」終止＋引用「と」。「都への道は遠いと聞く」。

Q71. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」

解説：「修行す」（漢語＋サ変「す」）の連用形＋尊敬「たまふ」。「山寺で修行なさる」。

Q72. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「登り」（四段連用形）＋「し」。上の係助詞「か」（疑問）の結びで連体形。「どの山に登ったのか」。

Q73. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「よかり」（形容詞「よし」連用形）＋「し」＋体言「こと」。「よかったこと」。

※ 形容詞連用形＋「き」は普通に成立。

Q74. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋逆接「ど」

解説：「降り」連用＋「しか」＋「ど」。「春雨が降ったけれども、花は散らない」。

Q75. 答え：副助詞「し」

解説：「のみ」（限定）＋「し」（強調）。「私だけが怒り、人は笑っている」。

Q76. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「恋せ」はサ変「恋す」の未然形＋過去「き」連体形「し」＋体言「人」。「昔、恋をした人を、今も忘れない」。

※ 過去「き」の連体形「し」・已然形「しか」は、サ変には未然形「せ」に付いて「せし」「せしか」となる（連用形「し」に付く「しし」とは言わない）。

Q77. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「散り」連用＋「し」＋体言「花」。「散った花、また咲くだろう」。

Q78. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「吹き」連用＋「し」（連体形。下に「こと」を補って読む準体法）＋係助詞「ぞ」＋ナリ活用形容動詞「あはれなる」連体形（ぞの結び）。「笛を吹いたのが、しみじみと心にしみる」。

Q79. 答え：過去の助動詞「き」已然形「しか」＋「ばこそ」（強調確定）

解説：「嘆き」連用＋「しか」＋「ばこそ」（～だからこそ）。下の「赤けれ」は形容詞「赤し」已然形（係助詞「こそ」の結び。「赤かれ」は命令形）。「嘆いたからこそ、目も赤いのだ」。

Q80. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「あり」連用＋「し」＋体言「昔」。「過ぎ去った昔」。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「あり」連用＋「し」＋体言「人」。「都にいた人を思い出すと、涙がこぼれる」。

Q82. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「住み」連用＋「し」＋体言「人」＋断定「に」＋係助詞「や」＋ラ変未然「あら」＋推量「む」。かぐや姫の話をつまえた作文。「月の都に住んでいた人なのであろうか」。

Q83. 答え：比況の助動詞「ごとし」終止形

解説：「ごとし」（比況、～のようだ）の終止形。「玉のようだ」。形容詞ク活用に類する活用をする助動詞。

※ 「し」が「ごとし」の一部であることに注意。

Q84. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「離れ」下二段連用＋「し」＋体言「男」＋格助詞「の」＋体言「心」＋係助詞「ぞ」＋形容動詞「あはれなる」連体形（ぞの結び）。「京を離れた男の心がしみじみと趣がある」。

Q85. 答え：形容詞ク活用「尊し」終止形

解説：「尊し」終止＋引用「と」。「とても尊いと、人々が皆涙を流す」。

Q86. 答え：副助詞「し」

解説：「旅を」＋強意の副助詞「し」＋係助詞「ぞ」＋「思ふ」（ぞの結びで連体形）。「し」を取っても「旅をぞ思ふ」で意味が通る。在原業平の歌「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（古今集・伊勢物語9段）の下句。「はるばるやって来た旅を（しみじみと）思う」。

Q87. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「詠み」連用＋「し」＋体言「人」＋形容詞已然「多かれ」＋逆接「ども」。「詠んだ人は多いけれども、心に残るのは少ない」。

Q88. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「渡り」連用＋「し」＋体言「人」。「中国に渡った人を、私こそ知っている」。

Q89. 答え：サ変動詞「す」連用形「し」（「ものす」の一部）

解説：「物す」（「物」＋サ変「す」で一語のように使う動詞。いらっしゃる・行く・ある・するなどを遠回しに言う）の連用形「物し」＋尊敬「たまふ」連体形＋体言「御方」。「し」はサ変「す」の連用形にあたる部分。「いらっしゃる御方」。

Q90. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「消え」下二段連用＋「し」＋体言「雲」＋比況「ごとし」。「明け方の空に消えた雲のようだ」。

Q91. 答え：形容詞シク活用「悲し」の連体形「悲しき」の活用語尾の一部

解説：「悲しき」(シク連体。「し」は活用語尾「しき」の一部)＋体言「こと」＋形容詞「多し」終止。「過去や未来をよくよく思うと、悲しいことが多い」。

Q92. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「祈り」連用＋「し」＋体言「かひ」(＝甲斐)。「仏に祈った甲斐がある」。

Q93. 答え：形容詞ク活用「ありがたし」終止形

解説：「ありがたし」(＝めったにない)終止＋引用「と」。「めったにないと人々が皆申し上げた」。枕草子の章段「ありがたきもの」でも知られる語。

Q94. 答え：形容詞シク活用「悲し」の連体形「悲しき」の活用語尾の一部

解説：「いみじく」(シク連用)＋「悲しき」(シク連体)＋体言「心地」＋サ変「す」。「ひどく悲しい気持ちがする」。

Q95. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「旅寝せ」はサ変「旅寝す」の未然形。過去「き」の連体形「し」は、サ変には未然形に付いて「せし」となる(名詞「旅寝」に過去「き」は付かないので、「旅寝し夜」とは言わない)。下が体言「夜」なので連体形。「旅寝をした夜の夢から覚めきれないまま、月を見る時がしみじみと趣深い」。

Q96. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「渡り」連用＋「し」＋連体「かの」＋体言「僧」。「中国に渡ったあの僧は、やはり我が国を恋しがる」。

Q97. 答え：過去の助動詞「き」連体形「し」

解説：「言ひ」連用＋「し」＋体言「人」＋格助詞「に」＋係助詞「ぞ」＋上一段「似る」連用形「似」＋存続「たり」連体形「たる」(ぞの結び)。「言った人に似ている」。

Q98. 答え：形容詞ク活用「あやなし」終止形

解説：「あやなし」(＝道理がない、わけがわからない)ク活用終止形。古今集の有名な歌「春の夜の闇はあやなし梅の花…」。「春の夜の闇は道理がない(梅の花の色は見えないが香りは隠せない)」。

Q99. 答え：①「よし」の「し」＝形容詞ク活用終止形 ②「告げしかば」の「し」＝過去「き」已然形「しか」の一部

解説：

- 「よし」(ク終止)×2：「月夜が良い、夜が良い」

- 「告げしかば」：「告げ」連用＋「しか」(過去已然)＋「ば」(原因)。「告げたので」

全体：「月夜が良い、夜が良いと人が告げたので、出て見ると、本当に明るい」。古今集の歌「月夜よし夜よしと人に告げやらば…」の言い方を借りた作文。

Q100. 答え：形容詞シク活用「久し」の連用形「久しく」の活用語尾の一部

解説：方丈記冒頭。「久しく」(シク連用。「し」は活用語尾「しく」の一部)＋「とどまり」連用＋「たる」(存続「たり」連体)＋体言「ためし」。「長くとどまっている例はない」。